

松山藩士の子に生まれ 生涯を師範教育に捧げた偉人

山路 一遊

元松山市立素鷲小学校長
伊予史談会会員
上岡 治郎

一、山路一遊先生の経歴

山路一遊先生は、安政5年(1858)松山藩士山路一番の長子として誕生。弟に佃家をついだ佃一予(内務省参事官・満鉄理事等を歴任)と山路一善海軍中将がある。明治17年、東京高師を卒業すると同時に文部省に入り、数年後には29歳という若さで高知県師範学校長となった俊秀である。そして以後、各県の視学官や師範学校校長を歴任。大正2年滋賀県師範学校長から郷里の愛媛県師範学校校長に転任、最後の十年間を全力投球し



山路一遊先生頌徳碑「師道鑽仰の碑」(左端)と師範学校本館

て勇退した名校長である。

二、先生の教育方針

先生が掲げた教育目標は、日本人はとかく島国根性に陥りやすいから何事にもどっしりと構え、利害にとらわれず、広く見識を養わねばならぬとするものであった。

そして、当時の知識注入主義の風潮を戒め、このような教育のやり方では模倣の上手な第二級の人物は出来ても、創造力のある第一級の人物は出来ないという人間教育の本質をついたものであった。

そして具体的な指導としては、学問は人格完成のために欠くべからざるものとして、学業不振者の教育にも力を注ぎ、全校生徒に日記を書かせて山路校長自ら朱筆で感想を書き込まれるなど、個性伸長に意を用いられた。次に生徒と教師の二つの事例を紹介する。

① たった一人の卒業式

(大正11年6月愛媛師範卒業 山本 亀) 私は4年生の第一期試験終了後から病気になる、第二期も全部休んでしまった。それで一年間休学だと思っていた。ところが12月下旬、山路一遊先生の旨を受けた主任の林伝次先生

から、「よくなったら冬休みに松山に来て校医に診てもらえ。その結果が良ければ、第三学期は出校して普通の授業を受けよ」と、思いがけない御手紙を頂いた。診察はパスした。私は第二学期が教育実習だったので、実習だけ学校に残れば卒業できる措置を取って下さったのである。

6月18日実習は終わった。校長室に呼ばれて、卒業証書と免許状を渡されるのだろうと思っていた。ところが翌19日、私一人の為に講堂で多数の先生方御臨席の上卒業式を行い、山路先生から卒業証書と免許状を授与されたのである。

中略 鈍馬な私に、これが教育者の精神であり、教育の真髄であることを事実を通して体得させ、また人間としてあるべき道を自覚させて下さったのである。

山本先生は卒業後「一人をおろそかにしない教育」を心がけ、校長になっても「一人の生命の尊厳を重視する学校経営」に心を傾け通されたのである。

② わが人生の師―山路一遊先生

(愛媛師範教官 林 伝次) 私が愛媛県師範学校に赴任したのが大正5年3月末、山路先生が愛媛師範の校長になられたのが大正2年だから、その4年目にあったわけである。それから大正12年3月御退官まではもちろんのこと、昭和7年8月御逝去の時まで、実に17年の長きにわたって、鑄化薫陶をうけたのである。教育者としての心構え、公人と



御退職後の山路一遊先生

しての生き方、その他人生百般について、あるいは明らかに、あるいは隠約の間に諭され教えられたことは、数限りなく多い。今までも、「右すべきか左すべきか」自分で決しかねたときなど、「山路先生ならこの場合どうなさったであろう」と考えなおすことよって、心のきまつたことも一再ではない。

山路先生は私にとってまさに人生の師とも申すべき方であって、長からぬ人の世にあって、人生の師として終生仰ぐべき方にめぐりあうことのできたのは、私の至幸至福といわなければならぬ。

林先生は「わが教え子、わがすべて」という実践記録を「愛媛教育」に掲載。以後、愛媛・東京の視学官、愛媛県師範学校長、埼玉大学教育学部長を歴任し、人材育成に成果を挙げられたのである。

三、「思ひ出を語る」

第一章 幼年時代

- ①文武の修業
- ②家庭教育
- ③親族の訪問
- ④正月と祭礼
- ⑤節句
- ⑥物見遊山
- ⑦友人の交遊
- ⑧長州征伐と朝敵
- ⑨打首、磔刑

生涯を師範教育に捧げた偉人

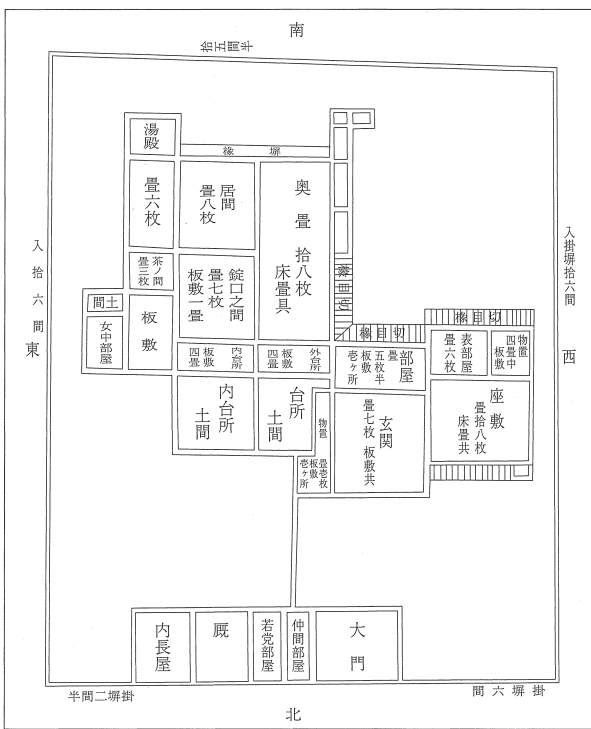
Ichiyû Yamaji

山路一遊先生が師範学校を退職された後、先生を慕う教職員や教え子達が交替で先生の家を訪ね、先生の口述される話を文章にまとめて行ったのが、この「思い出を語る」である。

幼児期の武家の家庭教育、幕末動乱期の松山藩の動向その他、貴重な歴史資料の集積と言っても過言ではない。

ただ残念なことは、山路先生の急なご逝去により「文部省仕官時代」で筆が中断している。しかし読者の参考に供する為に、ここに

- ⑩叔父東京より帰る ⑪家政 ⑫藩末の改革 ⑬松山藩の社会政策 ⑭廃藩置県
- 第二章 青年時代
 - ①洋典科入学 ②大失策 ③算数科と勝山学校 ④大阪行 ⑤大阪英語学校 ⑥大煩悶 ⑦北予変則中学校 ⑧東京師範学校入学
- 第三章 仕官時代
 - ①文部省出仕 ②小学校教則変遷の概略 ③文部省に於ける僕の仕事 ④群馬県出張 ⑤沖縄県出張 ⑥上官先輩の訪問 ⑦宴会 ⑧大日本教育会 ⑨高知県師範学校長兼任 ⑩錦を故郷に飾る ⑪文部省へ帰る ⑫江木翁に使わる ⑬森文部大臣 ⑭森文部大臣の教育改革 ⑮国体教育 ⑯人格氣質の養成 ⑰師範学校改革 ⑱小学校の改革 ⑲中学校の改革 ⑳学級編成の改正 ㉑学校の合併と整備 ㉒恩顧の名士 ㉓又大失敗
 - 東京居住とその苦楽



山路一遊先生生家見取図

山路一遊先生の父・一審は石手川を洪水から守った大川文蔵の子孫で山路家に養子に来る。また先生の妻・順は内藤鳴雪の長女であり、弟・一予の養家は加藤嘉明の重臣佃十成の子孫である

「幼年時代」の文章の一部を掲載する。

①家庭教育
曾祖父は暗い部屋に始終寝ていた。そこへ私は毎朝挨拶に行く。何歳頃か覚えぬが曾祖父は、「真喜さん（私の俗名を真喜多とった）食物を表へ持って行ってはいかん。卑怯なことをするな。偽を言ってはいかん。」と、繰返し教えてくれた。

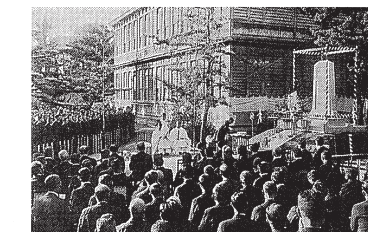
これが、侍の子として教えを受けた最初のもので、何時までも、耳底に残っているものである。

私の家は南堀端の西南で、約三百五十坪の敷地であった。（石高二百十石）
父は第十四代の藩主勝成公の御

側役で、毎日午前八時に出勤する。勝成公は鷹狩がお好きで、北御門から御出になって西堀端を通り私の家の横を通って萱町より出て吉田浜で鷹で鴨狩をなさる。

まっ先に藩の仲間が二、三人駆け、次に父が先駆する。次が勝成公で、後に六、七騎位君側が子供をしたものだ。よく父が先駆をするのだから、殿様の鷹狩を承知すると早朝に堀端で殿様を拝む。殿様がお出でになると土下座する。

ある時、私が一寸頭でも上げたのであろう。後から殿様が「あれが、お前の息子か。」と問われたそう、大いに光栄を感じた。その時分、殿様を拝むことは非常にうれしかったものだ。



愛媛県師範学校本館前に建立された山路一遊先生頌徳碑除幕式典(昭12.11.22)
当日の参加者 来賓 200名
師範学校職員・生徒 600名 } 計800名

現在、師範学校にあった碑は愛媛大学に移転。他に同型同文の碑が祝谷の愛媛文教会館と重信町樋之口に建立され、山路一遊先生への鑽仰と愛媛教育の発展を祈っているのである。

②長州征伐と朝敵
家茂將軍が元治元年長州征伐の令を下した。その時藩主勝成公が軍勢を率いて東中島の神の浦に陣取ったことがある。打続く泰平後の出陣でえらい騒ぎだったろうが、私は七歳だから詳しくは覚えておらぬ。父は勝成公の君側故、神の浦へお供をした。……明治元年の伏見戦では、松山藩は朝敵と見られて追討を命ぜられた。……松山藩では激論の後、朝命を待つという事に決まった。それで早くも土佐の軍勢は久万山を経て松山に攻入るわけである。

この時父がお使番であつて、久万山に馬を駆けて迎接をした。……（以下略）

四、おわりに